

大地の煙突から、いよいよ煙があがる季節となりました。同時に、田んぼは黄金色から藁束の残る茶色の模様となり、その先に赤い実を付けるリンゴ畑が映える里山の光景も美しくなりました。

そして、恒例の薪運び。「お仕事したい！」という子ども達の要求と憧れを満たす大地伝統の10月の光景です。大地の仮称「水車（みずぐるま）」（玄関の門柱が、水車の軸であることと、旧みずぎくらと似ている理由）の工事の職人さんたちが、驚嘆と絶賛する子どもたちの働きぶりです。たくさんの薪を持つこと、ヘルメットを被る誇り、難しい位置に座ること、普段は絶対に行けない未知の青ちゃん家の2階や屋根の上。様々な子どもにとってのワクワクする、心躍る世界があります。羨ましそうに見ている年少児。この憧れが、大きくなることへの原動力になります。だから、「丁度いい、苦勞せず、無理せず、中庸なその時、楽にできるレベルの環境を、大人が補助、準備するよりも、憧れる、上のレベルを用意して、その中に子どもを置く、できなくても、その環境にいる、挑戦する機会を与え、失敗してもやらせてみる」この大人の見守り（器）が、子ども達の成長力となり、大人と同等にみてもらった、信頼された、存在をみつめられた、そして、「かえがえのない存在」と認知された、誇りと自信と大きくなることへの憧れが持てるのでしょ。

薪運びの姿から、子どもたちの「どうか、自分の姿を見てくれ」というキラキラしたエネルギーが痛いほど感じられます。今年の冬も、暖かい薪が燃えることでしょう。

【おはなし】

「私の将来の夢は、妻と一緒に全国の幼稚園や保育園や子供たちの集まりや大人のコミュニティ（会社や集まり）などに、一服の清涼飲料のように、旅をしながら、お話や手遊びやゲームなどを、ボランティアで出前（一方的なもの）をして歩くことです。（略）近年にない大雪の除雪で腰を痛め、2週間ほど床に伏せながら、お話のこと、妻との将来の夢を語っていました。自分の知り合いの幼稚園保育園、友人の会社や家族などを訪ねながら、お話をしたりして楽しんでもらい、旅を重ね、趣味の登山で山を登りながら、テント場や山小屋で、星を見ながら、お話を語るのが、引退後の私達の夢です。」（2011年3月某日 東京子ども図書館おはなし講習生 応募理由）



先週末、妻と大阪の最南端の町、岬町という町にある図書館主催のお話会へ行ってきました。なんと、聴くという立場ではなく、お話グループの大人たち40名ほどの人たちに語る、いわば大地の文化講演会の細川さんや藤本さんの立場でした。海千山千の何十年も続けてきている人たち相手であり、妻も、プログラムの組み立てに悩み、それ以上に、私も緊張していました。一話ではなく、連続して違う話をするこの不安、気持ちの入れ替え、最後までエネルギーを持ちこたえることができるか……。2時間という長時間で、妻と同等の存在で語れるのか……。

考えてみれば、2年半前、本格的にお話を学ぼうと思った動機が、2つあり、一つは「自分自身の中の静と動のバランス」そして、もう一つは、冒頭の理由です。つまり、この機会が、何と夢実現の本格的な第一歩になったのです。

自分の中では、旅を満喫しながらお話を語る、楽しむというイメージでしたが、そうはうまくいきません。出かける一週間前は、寝ても覚めても手元にお話の手紙があり、ぶつぶつぶやき、前日の車では、ずっとしゃべり続け、着いた早々、主催者の友人がヨットに乗ろうと誘われ、大阪湾をクルージングしても、お話の不安がよぎります。前日、泊まった民宿の美味しい海の幸のごちそうも十分堪能できず、当日の朝は、3時ごろに目が覚め、夜釣りや早朝の釣りの人たちの横で、テキスト片手にずっとしゃべっていました。まるで、受験生のような感じでした。でも、やるだけやっという気分は充分になりました。あとは、その物語の世界を自分の中で満喫するだけ。

ちなみに、私のお話は「ついでにぺろり」「川へおちたたまねぎさん」「六人男 世界をのし歩く」の3話でした。「六人男」が最後のトリという位置に、プログラムは編成されていました。妻曰く「今回は、これが主役だから」と。「ありがとう、恐れ多い、いい役をもらって、デビュー戦 がんばるよ」……。

聴衆が、とても素晴らしい聞き手の人たちでしたので、まるで引き出されるようにお話がスムーズに流れ、あっという間に、2時間が過ぎ去りました。今回のプログラムは、詩やわらべ歌や手遊びや小道具を使った季節の遊びなど、大地の普段の保育で展開されている物が、とてもうまく組まれており、これは絶対に、大人でも子どもでも面白いだろうな、飽きないだろうなと直感的に理解でき、妻のおはなし会にける熱意が感じられました。そんな流れにうまく乗せられ、自分も語り手でありながら、聴衆と一緒に楽しめる余裕がありました。結果的には、2人は、やるだけやっとても楽しく、充実感のある満足のいくものになりました。

当初は、受験生のように、お話を丸暗記して覚えること、それを伝えること、その暗記を伝えるという、塾の講師のようにイメージしたお話。東京子ども図書館の講習会も、ほとんどが、仲間の覚えてきた語りを聞くだけの時間でした。テクニックや技術や方法論を学ぶのではなく、今、考えれば、ほとんどが精神的にお話を自分で楽しむという機会だけでした。授業料を払い、交通費をかけて、他人の話聞き、苦勞して覚えた話を皆の前で緊張して話す（発表する）という2年間でした。当初は、他人の話聞きながら、眠りそうになったり（実際に眠っている）、自分の番まで、ドキドキして、他人の話聞きなかつたりしていましたが、会を重ねるごとに、だんだん人の話を楽しめるようになってきました。お話をする方々は、ほぼ全員「お話を聞くのが3度の飯よりも好き」と言います。誰が話すお話を言うよりも、誰でもいいから、そのお話を聞きたい 出会うお話を楽しみたい という人たちです。だから、人を選ばず、誰にでも平等で、皆 温和で暖かい人たちなのでしょう。まさに、シュタイナー教育の4つの感覚のうちの「平衡感覚」が研ぎ澄まされている人たちのように感じます。

そんな人たちに囲まれ、その人たちのお蔭で、引き出されてきたのでしょうか。今、思えば、そんな2年間だったような気がします。今回の大阪も、本当に素晴らしい聴衆に、引き出されました。一番理解しがたかった「平衡感覚」（他人との距離を平衡に保つ）の意味が、お話を通じて理解できたように感じます。そして、何よりうれしかったのは、主催者の方が、数時間後電話で、「今回のお話会は、皆が全員幸せな気持ちになれました」とおっしゃって下さったことです。私たちは、この言葉を聞いて、更に幸せな気分になりました。まさに幸せの相乗効果でした。

冒頭にある、お話をしながら、全国の旅を楽しむ というどちらがメインなのかかわからない自分がありましたが、今では、お話だけでいいと思っています。幸せの旅をもたらしてくれるお話だけで充分だからです。それも、夫婦で形のある物を作るクリエイティブな作業と一緒に楽しむ登山や活動的な色彩のあるものではなく、お話をいう精神的な世界を構築するというスピリチュアルな旅を楽しむ という魅力的なものがあるからです。

大地の子ども達をと共に、今度は、どんなスピリチュアルな旅を楽しめるか、楽しみです。